

# ヤンゴン・ダウンタウン（ミャンマー）の形成と 変容に関する研究

## －民族・宗教施設・コミュニティ施設の分布と その変容に着目して－

項 一朗 \*

### 【要旨】

ヤンゴンでは、英領ビルマの植民地政策に基づき、多民族、多宗教が混在する都市において、民族別の居住地が形成され、現在までその構成が基本的に維持されている。英領期のヤンゴンへの移民は、主に中国人、インド人、ヨーロッパ人であり、都市の形成や、宗教施設、コミュニティ施設などの建設は、大きくはこの三つの移民グループによるものであった。ヤンゴンでは、1850年代から中国人とインド人が国際的な商業活動を展開し、多くの中国人とインド人が移住するようになり、それにもなつて多数の宗教施設、コミュニティ施設が建設された。本研究では、ミャンマーのヤンゴン・ダウンタウンに分布する民族ごとの宗教施設やコミュニティ施設に着目し、それらの立地の空間特性、および形成と変容過程について分析、考察する。特にヤンゴン・ダウンタウンにおける移民の中核をなす華人およびインド系移住者の宗教施設、コミュニティ施設を中心とし、立地の空間特性や形成、変容のプロセス、出身地との関連に見られる特徴などを明らかにする。

キーワード：ヤンゴン・ダウンタウン、ミャンマー、植民都市、海外華人、インド移民

## 1. はじめに

### 1.1 研究目的と背景

本研究は、ヤンゴンの都市空間形成と変容に関して、民族、宗教施設、コミュニティ施設の分布とその変容に着目して分析考察することを目的とする。東南アジアの多くの都市では、インド、中国、ヨーロッパなどから多くの移民が流入し、多民族社会が形成されてきた歴史がある。本研究では19世紀後半以降に本格的な都市の形成と発展が見られたミャンマーのヤンゴンの形成と変容について、現地調査に基づき実証的に明らかにするところに特徴があり、他の東南アジアの都市の形成と変容に関する研究にも大きな示唆を与えられると考えられる。

---

\* 関西学院大学大学院総合政策研究科博士課程前期課程 (dmc12733@kwansei.ac.jp)

1852年の第二次英緬戦争でヤンゴンを占領したイギリスは、ヤンゴン川の河口近くに位置する立地から、重要な港としての発展の可能性を予見し、河岸に沿った新たな都市を計画する。ベンガル政府の軍医長としてビルマに來訪し、シンガポールで行政長官の経験もあったウィリアム・モンゴメリーWilliam Montgomerie と、ベンガル政府の技師アレクサンダー・フレイザーAlexander Fraser によってヤンゴンの都市計画が立案され、それが現在のヤンゴン・ダウンタウンの原型となった。

ヤンゴンでは、英領ビルマの植民地政策に基づき、多民族、多宗教が混在する都市において、民族別の居住地が形成され、現在までその構成が基本的に維持されている。英領期のヤンゴンへの移民は、主に中国人、インド人、ヨーロッパ人であり、都市の形成や、宗教施設、コミュニティ施設などの建設は、大きくはこの三つの移民グループによるものであった(図1)。ヤンゴンでは、1850年代から中国人とインド人が国際的な商業活動を展開し、多くの中国人とインド人が移住するようになり、それにともなって多数の宗教施設、コミュニティ施設が建設された。



図1 ヤンゴン・ダウンタウンにおける移住者居住区

これまで、ビルマの植民地社会を対象とした研究としては、社会学、経済学や地域研究分野において、移民の民族アイデンティティに関する研究や、移民社会の経済発展に関する研究(Green, 2015)などが見られる。ヤンゴンにおける華人とインド人移民のアイデンティティに関する研究(Myra, 1997)や、ヤンゴンの都市計画と公共建築に関する研究(Girke, 2015)などがある。しかしながら、宗教施設、コミュニティ施設の立地に着目し、民族やコミュニティ分布の視点からヤンゴンの都市空間構成とその変容について分析考察した研究は見当たらない。

東南アジアの都市に華人街に関しては、これまで植民地の都市計画やショッピングハウスなどに関連した多くの研究蓄積がある(泉田, 1990; 泉田, 1994; 安藤, 1987; 安藤, 1988; 布野, 2005; ン, 2005; 宇高 & 東樋, 1995)。東南アジアの華人会館については、例えばマレーシアのペナンなどで会館に関して整理した文献がある程度まとまっている(Tan, 2007; Cheah, 2012; Tan & Ooi, 2014; Penang Chinese Clan Council., 2013)。ヤンゴンの華人を対象とした研究では、経済学や地域研究分野において、内田直作のヤンゴン華人社会の構造に関する研究(内田, 1974)や、長田紀之のヤンゴンにおける華人移民と都市統治問題に関する研究(長田, 2016)などがあり、会館の組織構成などについて考察しているが、それらは主とし

て華人の社会構造に焦点を当てたものであり、華人会館の立地に着目し都市空間構成の視点から分析考察した研究は見当たらない。

## 1.2 研究方法

本研究は、2017年12月から2019年3月にかけて実施した、ヤンゴン・ダウタウンにおける現場調査で入手した資料およびフィールド調査データに基づき分析と考察を行う。現地調査では、ヤンゴン・ダウタウンの都市形成および宗教施設、コミュニティ施設に関する文献資料等の収集を行うとともに、ヤンゴン・ダウタウン全域における宗教施設、コミュニティ施設の分布調査を実施した。華人居住区では、華人の中核をなす福建地方出身者および広東地方出身者に関する資料に記載されている、各コミュニティの会館、廟、宗祠等の設立年、設立団体の出身地、氏族、職業等を整理し、会館等の立地場所との関連性を分析した。

宗教施設、コミュニティ施設の分布に関する分析においては、民族、宗教、宗派、コミュニティの出身地、設立年代などの視点から、施設分布の空間特性とその変遷を読み解く分析を行った。その過程でGISソフトを使用した分布指向性分析やカーネル密度推定などの分析も行った。それらの分析結果に基づき、施設分布の空間特性やその変遷の要因について、ヤンゴンの歴史、社会環境の変化、各コミュニティの文化的背景、コミュニティ相互の関係性などの視点から考察を行った。

## 2. ヤンゴン・ダウタウンの都市形成と宗教施設

第二章では、ヤンゴンに関する歴史資料、先行研究をレビューし、ヤンゴンの都市形成、都市計画および多民族、多宗教が共存する都市空間の特徴について明らかにした。

ヤンゴン・ダウタウンの都市計画においては、華人、インド人、ヨーロッパ人三つの移住者それぞれの居住区が形成された。華人は大きく広東系出身者と福建系出身者に分かれており、それぞれの中心的宗教、コミュニティ施設として「広東観音古廟」と「慶福宮」が建設され、さらに華人居住区内に126の華人会館と宗教施設が建設された。インド人移住者は、宗教的には大きくヒンドゥー教徒とイスラム教徒に分かれており、ダウタウンにある69のインド系施設の内、15か所のヒンドゥー教寺院と26か所のモスクが確認できた。また、ヨーロッパ系の施設は16か所確認された。さらにダウタウンには142か所のビルマ系宗教施設が確認できた。ビルマ系宗教施設は、仏教寺院が26か所、ビルマ系住民のために基本的に南北各街路に一つずつ設置されたダマヨン *damayone* と呼ばれる仏教講堂が70か所、その他、ブッダや土着の精霊を祀る祠が57か所存在する（図2）。

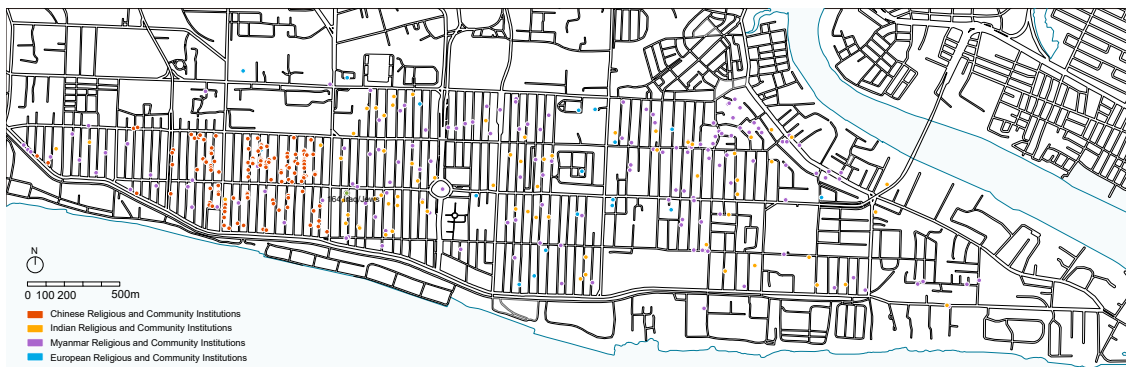


図2 ヤンゴン・ダウンタウンにおける民族、宗教施設の分布状況

### 3. ヤンゴン・ダウンタウンにおける宗教施設の空間分布

本章では、ヤンゴン・ダウンタウン全域における宗教施設、コミュニティ施設について、民族、宗教、宗派、設立コミュニティの出身地、建設年代などの視点から施設分布の空間的特質を分析した。分析にあたっては、GISソフトを使用したカーネル密度推定などの手法も用いた。その結果、華人会館は1850年代から基本的には1960年代以前に建設され、華人居住区内に限定的に立地していることが明らかになった。インド系宗教施設は1930年代以前に建設されたものが多数見られるが、1930年代以降に建設されたものもわずかに見られる。また、インド人居住区内に立地する一方で、都市の北東側にも多数見られ、都市の西端エリアにはわずかししか見られない。ヨーロッパ人宗教施設は1910年代以前に建設され、西洋人居住区に多数立地し都市内の開放空間に囲まれるという特徴が見られる。ビルマ系宗教施設は都市全域に分布するが、仏教寺院は都市の北東エリアに密集し、ダウンタウン内に広く分布するのはダマヨンが多数を占め、基本的には1960年代以降に設立されたものであることが明らかになった。さらに、各民族の宗教施設はお互いに避けて立地する傾向があることが明らかになった（図3、4）。



図3 インド系宗教施設分布のカーネル密度推定分析

インド系および華人の施設の設立がある年代以降減少した要因としては、1930年代から1960年代にかけてのインド系住民とビルマ系住民との間での衝突、および1960年代の華人とビルマ系住民の間の衝突の影響が考えられる。

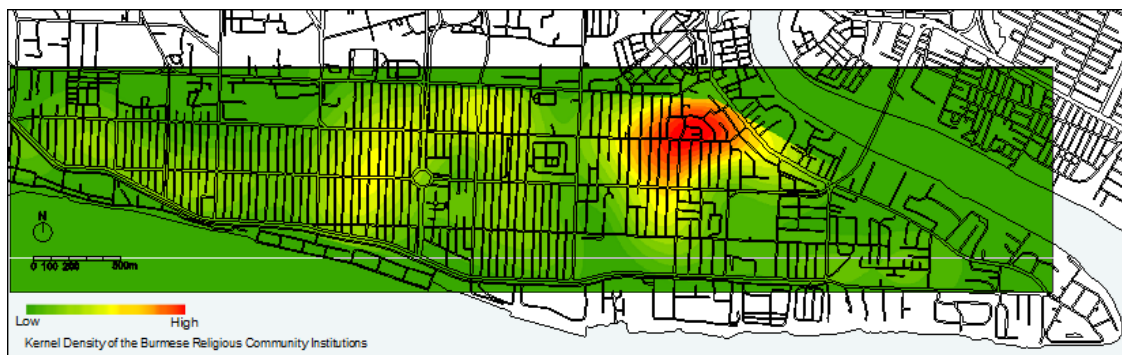


図4 ビルマ系宗教施設分布のカーネル密度推定分析

#### 4. ヤンゴン・ダウンタウンにおける華人会館の分布と変容

本章では華人会館の分布と変容における空間的特質について分析、考察を行った。ヤンゴン・ダウンタウンの華人は大きくは福建系と広東系に分かれており、福建系華人会館は華人居住区全域に分散して立地する一方、広東系華人会館は華人居住区の北東エリアに集まって立地していることが明らかになった。福建系会館と広東系会館は、それぞれのコミュニティが最初に建設した宗教施設「慶福宮」と「広東観音古廟」を中心とし分布する傾向があることが明らかになった。華人会館の設置における場所選定の一つの要因は、設立団体の出身地方であると考えられる。広東系会館は、最初に設立された五邑会館や広東観音古廟を中心としてその周囲に建設されてきたと考えられる。福建系会館については、1864年に建てられた慶福宮を東西の中心として、華人居住区の全域に分散するように会館を建設したと考えられる。さらに市、県レベルの出身地や、属する方言集団が、会館の立地や移動時の敷地選定と密接に関係していると考えられる。

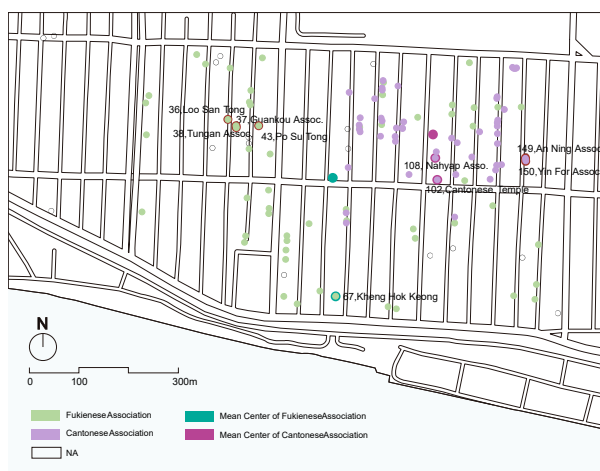


図5 華人宗教施設の分布

分布の変容の大きな要因の一つは第二次大戦時の会館の閉鎖や戦災で、戦後に建物の新築とともに敷地を移動した会館が多く見られる。その際、出身地や方言が共通するコミュニティの会館は互いに近隣に集まっていった傾向が見られた。一方、福建系華人と広東系華人は対立した歴史もあり、福建系

会館と広東系会館は互いに距離をとって立地する傾向が見られ、また、業種を基盤とする会館でも、雇用側のコミュニティの会館と被雇用者側のコミュニティの会館の間で、敷地選択の際に互いに距離を取る傾向も見られた（図5）。

## 5. ヤンゴン・ダウンタウンにおけるインド系施設の分布と変容

本章ではインド系施設の分布と変容について分析、考察を行った。インド系移住者は南インドのタミル地方やアーンドラ地方、また東インドのベンガル地方の出身者が多数を占め、西インドのグジャラート地方の出身者も見られる。宗教的には主としてヒンドゥー教徒とイスラーム教徒に分かれる。出身地や宗派別に建設されたイスラームの礼拝施設であるモスクが当初のインド人居住区を中心として多数分布する。宗派としてはスンニ派のモスクがほとんどで、かつてのヨーロッパ人居住区にも分布が広がっていることが明らかになった。シーア派のモスクの数は少数であるが、グジャラート地方出身のシーア派の分派教団によるものが見られた。ヒンドゥー教寺院にも出身地や祭神を異にする多様な寺院が見られるが、さらに道沿いの樹木などに設置される祠も多数分布し、ヒンドゥー教施設全体としては、ダウンタウン全域に分布していることが明らかになった。その中でタミル系のヒンドゥー教寺院はインド人居住区の北側とダウンタウン北東側に比較的集まっている傾向が見られた。インド系宗教施設の設立時期について見ると、かつてのインド人居住区とヨーロッパ人居住区に立地するインド系施設は19世紀に設立されたものが多く、その外側のエリアのインド系施設は基本的に20世紀以降に設立されたものであることが明らかになった（図6）。



図6 イスラーム宗教施設建設時期

## 6. 結論

本研究では、ヤンゴン・ダウンタウンにおける各民族の宗教施設、コミュニティ施設の分布とその変容を明らかにし、その空間的特質について分析、考察した。現地調査によって得られた文献資料やフィールド調査データに基づき、地理情報システムを用いるなどして、施設分布の空間的特質を分析した。

その結果、各民族の宗教施設、コミュニティ施設は基本的に都市建設当初に形成された各民族のかつての居住区に集中して立地することが明らかになった。そして華人およびインド系の施設分布に見られる空間的特性は、各施設の設立コミュニティの出身地、方言、宗派、教団等に影響されていることが明らかになった。さらに、ビルマの独立とその後の脱植民地化の中で、1960年代以降、ビルマ系の施設、特に住民のための仏教講堂であるダマヨンがダウンタウン全域に広く設置されるようになり、かつての華人、インド人、ヨーロッパ人の施設とビルマ系の施設が混在する現在の都市景観が形成されるようになったことが明らかになった。

【参考文献】

<英語> (ABC順)

- Cheah, S. K. (2012). *The Chinese: Two Hundred Years in Penang*. Han Chiang College, Han Chiang Chinese Heritage Center.
- Girke. (2015). *The Yangon court buildings: Between thick and thin heritage*. *Journal of Social Issues in Southeast Asia*, 30(1), 72–102.
- Green, N. (2015). *Buddhism, Islam and the religious economy of colonial Burma*. *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 46(No. 2), 175–204.
- Mya, T. (1997). *Ethnic Chinese as southeast Asians: Vol. The ethnic Chinese in Myanmar and their identity*. New York: Palgrave Macmillan Press.
- Penang Chinese Clan Council. (2013). *Chinese Clans in Penang: A Concise History (Volume 1)*. Penang Chinese Clan Council, Phoenix Press Sdn. Bhd.
- Tan, K. H. (2007). *The Chinese in Penang A Pictorial History*. Areca Books.
- Tan, K. H., & Ooi, B. K. (2014). *The Story of Hokkien Kongs, Penang*. Hokkien Kongs.

<日本語> (あいうえお順)

- ンアイリーン 他. (2005). マレーシア・ペナン島のショッピングハウスに関する研究 ジョージタウン市における伝統型ショッピングハウスの空間構成について. *日本建築学会計画系論文集*, 第 597 号, pp.1-7.
- 安藤徹哉. (1987). バンコクのショッピングハウスの成立とその実態に関する考察. *都市計画論文集*, 22 卷, pp.157-162.
- 安藤徹哉. (1988). バンコク中心市街地のショッピングハウスの構成に関する研究. *都市計画論文集*, 23 卷, pp.319-324.
- 内田直作. (1974). ラングーンにおける華僑社会構造 —福建幫と広東幫について—. *成城大学経済研究*, 45 号, pp.61-81.
- 宇高雄志, & 東樋口護. (1995). マレーシア都市における多民族居住と居住空間—ジョージタウン市の都心街屋地区の高密度民族混住の実態を通じて—. *都市計画論文集*, 第 33 回, pp.487-492.
- 布野修司 他. (2005). マラッカ (マレーシア) 旧市街の空間特性と住居形式に関する考察. *日本建築学会計画系論文集*, 第 590 号, pp.41-47.

- 泉田英雄. (1990). シンガポール都市計画とショップハウス 東南アジアの植民地都市とその建築様式の研究 その1. 日本建築学会計画系論文報告集, 第 413 号, pp.167-172.
- 泉田英雄. (1994). 屋根付テラスと連続歩廊の街並み景観について 東南アジアの植民地都市とその建築様式に関する研究 その2. 日本建築学会計画系論文集, 第 458 号, 145-153.
- 長田紀之. (2016). 胎動する国境 英領ビルマの移民問題と都市統治. 山川出版社.